

## The Development of the Greek Organizations in Post-War Australia: Social Division and Reorganization

Maiko MATSUURA

### SUMMARY

This paper provides an overview of the activities of Greek immigrants to Australia after World War II. They established various ethnic organizations. The first half of the 20th century was a period of social and economic hardship for Greek-Australian residents. They needed to create social bonds in order to help each other. On the other hand, ideological and political conflicts in Greece led to their division. The new generation born in Australia is seeking a way of creating new Greek society, distancing from Greek government. At the end of this paper, I introduce an example of a Greek association, the Kalymnian association of NSW.

Key words: Greek immigrant, Greek community in Australia, identity

### はじめに

本稿では、第二次世界大戦後にオーストラリアに移民し、様々な地域組織を築いていった、ギリシア系オーストラリア人の活動を概観する。20世紀前半は、ギリシア系住民にとって社会的・経済的苦境の時代であり、彼らは相互扶助のために、社会的に結合する必要に迫られていた。他方で、ギリシア本国のイデオロギー上または政治上の対立は、彼らの分断を招いた。オーストラリア生まれの新世代はギリシア本国から距離を置いた、新しいギリシア系組織の在り方を模索している。本稿の最後に、筆者が実際に交流したギリシア協会の例を紹介する。

## I. オーストラリアのギリシア移民の規模

### 1. 在外ギリシア人の概要

現代ギリシア語には在外ギリシア人に対して様々な呼び名が存在する。「Διασπορά ディアスポラ」「Απόδημοι アポデイミ (海外の住人)」「Ομογένεια オモゲニア (同質の人々)」などが代表的である。ディアスポラは、比較的最近になってギリシア文学で採用された。一般に、ある民族の中で国外追放された一部の人々を指す。彼らは他国領土に定住しているにも関わらず、出身国との社会的関係を維持している。アポデイミは、さまざまな理由で祖国を離れ、通常は外国、あるいは異質

---

<sup>1</sup> 高知工業高等専門学校 ソーシャルデザイン工学科准教授

で遠い場所に移住した人々のことである。オモゲニアは外国で生まれた同胞という意味を持つ。いずれの呼び名も出身国との一体性または個人的、社会的結合の維持という意味合いが含まれている。

在外ギリシア人を表現する言葉が複数あることからわかるように、移民はギリシア国家の形成に深く関わってきた。ギリシア政府機関による見積もりでは、現代において在外ギリシア人の総数は400万人以上と推定される<sup>2</sup>。これはギリシア人口の三分の一に相当する。ギリシア国家はこの大きな人口を軽視することなく、憲法の特別規定108条において<sup>3</sup>、国家が主体的に「ギリシア国外で働くギリシア人の教育並びに社会的及び職業的な向上に配慮する」必要性を規定している。

ギリシア本国と在外ギリシア人の関係は時間の経過や世代交代とともに希薄になっていくが、他方で「共通の祖先をもつ」という集合的記憶は、現代においても個々人のアイデンティティに多かれ少なかれ影響を与えている。本稿では、20世紀全体を通して、出身国の政治的・経済的影響を受けながら結合と分断を繰り返して来たオーストラリアのギリシア系組織の歴史を概観し、在外ギリシア人の地域概念やアイデンティティの変化を分析していく。

## 2. ギリシア独立後の海外移民の動向

近代ギリシア国家は1830年にオスマン帝国から独立した。その後、1913年にクレタ島、マケドニア地方、イピロス地方を獲得し、1947年にドデカニサ諸島を含む現在の領土まで拡大した。国家成立から1890年代までの国外移民は散発的で、主な移住先はバルカン諸国、中央ヨーロッパ、ロシア、アフリカだった。1890年頃から移民の傾向が変化し、アメリカ合衆国への移民が増加した。19世紀初頭にアメリカ合衆国が移民の入国を制限するために立法措置をとった影響で、1922年からアメリカ合衆国への移民数は減少し、代わりにカナダ、オーストラリアなど、新しい目的地が追加された。第二次世界大戦終結後、再び大きな移民運動が起こった。ギリシアからの海外移民は1960年以降に急増し、最終的に1965年には11万7,167人に達した（図1）。戦後の移民の流れは、アメリカというよりもむしろそれ以外の地域に向かっていた。西ドイツを中心としたヨーロッパ諸国への移民が多くを占めたが、それ以外の移民はオーストラリア、そして二次的にカナダへと向かった（図2）。

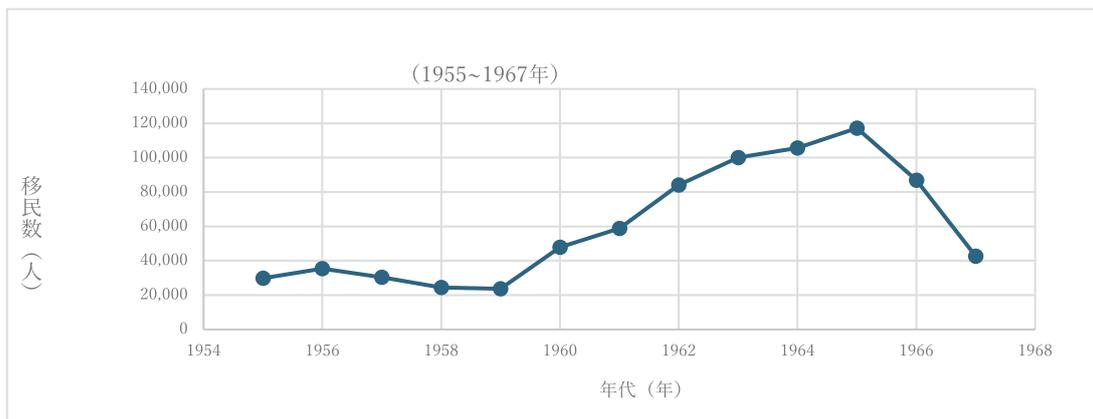
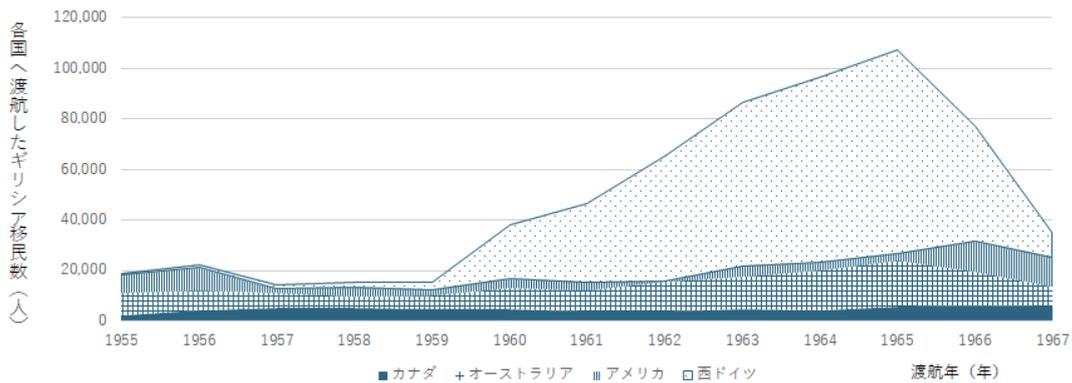


図1 ギリシアの海外移民数

<sup>2</sup> 在外ギリシア人総事務局ホームページより。https://web.archive.org/web/20090901195741/http://www.ggae.gr/

<sup>3</sup> 「1. 国は、外国に移住しているギリシア人の生活及びこれらの者の祖国とのつながりの維持に配慮する。また、ギリシア国外で働くギリシア人の教育並びに社会的及び職業的な向上に配慮する。2. 在外ギリシア人会議の組織、運営及び権限については、法律で定める。その任務は、世界中のギリシア人の全ての共同体を表現することにある。」国立国会図書館調査及び立法考査局『各国憲法集（5）ギリシア憲法』（2013年）76頁より抜粋



\* 図1、図2とも Ιωάννα Μαγγανάρη, Ευστάθιος Σορόκος, “Οι απόδημοι Έλληνες”, *The Greek Review of Social Research*, 2, (1970)のデータより作成。

図2 ギリシア移民の渡航先 (1955年から1967年)

つまり、1960年代以降のオーストラリアへのギリシア移民の流れを後押ししたものは、戦後のギリシアにおける政治的・経済的に不安定な状況、そしてアメリカの移民制限政策であった。

### 3. オーストラリアのギリシア人

現在のオーストラリア在住のギリシア生まれの人口について、オーストラリア統計局によると最も人口が集中しているのはメルボルンを拠点とするビクトリア州、次いでシドニーを拠点とするニューサウスウェールズ州である (図3)

\* オーストラリア統計局の資料をもとに作成 <https://www.abs.gov.au/statistics/people/population/historical-population/latest-release#population-age-and-sex-structure>



図3 ギリシア生まれ人口の分布 (2021年6月30日)

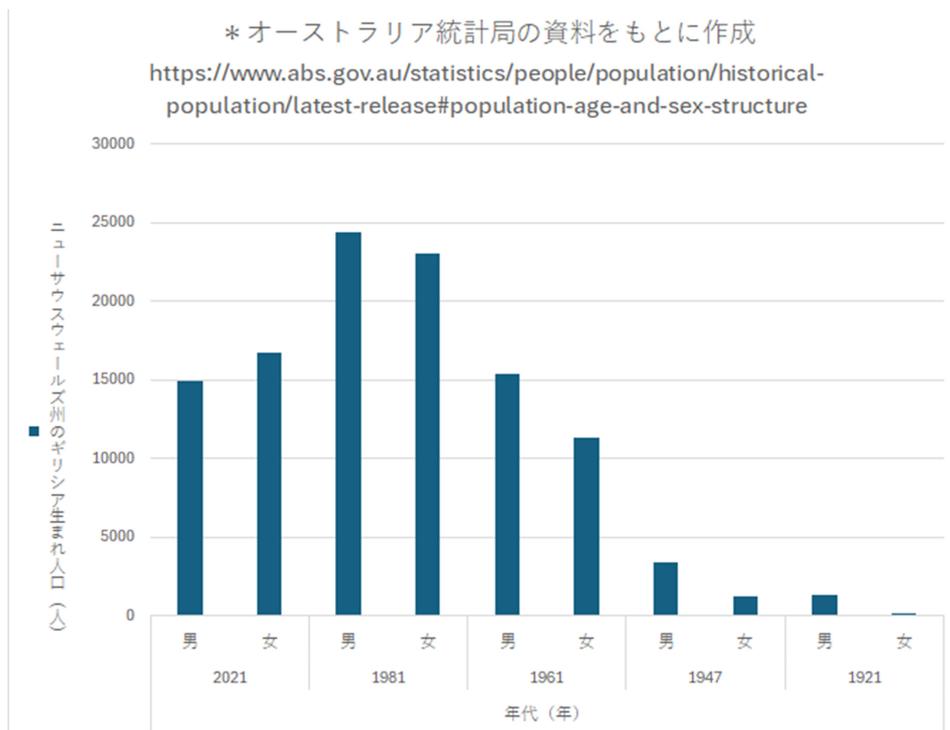


図4 ニューサウスウェールズ州のギリシア生まれ人口の増減

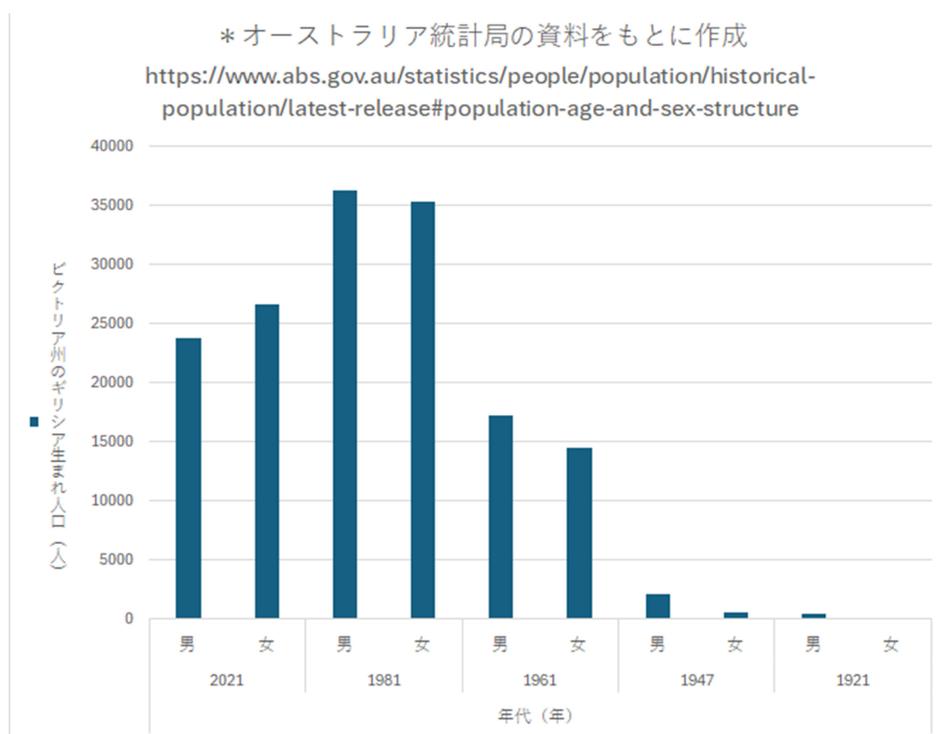


図5 ビクトリア州のギリシア生まれ人口の増減

上記2州のギリシア生まれ人口の増減を示したグラフが図4、図5である。1960年代から両州へのギリシア移民が増大していることがわかる。オーストラリアのギリシア移民を研究するアナスタシオス・タミスは、ギリシア生まれの人口の85%が、1952年から1974年の間に移住したと見積もる。また、図4から1980年代に入るまで男女の人口に不均等があることがわかる。1962年まで、オーストラリアではギリシア生まれ男性100人に対し、女性53人という男女不均衡が生じていた。このよ

うな状況が生じた背景には、第一にオーストラリア政府が独身女性の移民を厳しく制限していたこと、第二に厳しい経済状況や最初の定住が困難であったため、多くの既婚男性が家族をギリシアに残していたという事情があった<sup>4</sup>。1962年以降、ギリシアからの何千人もの独身女性の州を越えた永住が計画され、1980年代以降は男女比については大きな不均衡は見られない。

## II. 20世紀前半のオーストラリアのギリシア移民の姿

### 1. 文芸雑誌に描かれた1950年代のシドニー在住ギリシア人の姿

19世紀末に誕生したオーストラリアの週刊文芸雑誌『ブレティン』では、1952年に「ギリシア人がギリシア人と出会うとき」という記事を掲載している<sup>5</sup>。内容は、ライバル関係にあるシドニーのギリシアレストラン「アテネ」の経営者カサディアスの息子と「アクロポリス」の経営者パンガロスの娘がギリシアクラブで出会い、恋に落ちるという内容である。若いカップルの結婚が決まると「持参金」問題が持ち上がる。パンガロスが持参金や披露宴費用を値切ったところ、カサディアスは「私と息子には、守らなければならない社会的地位がある」と答えた。カサディアスが結婚費用を肩代わりすることで決着がついたが、代わりにパンガロスのレストランがカサディアスの息子名義で譲渡されることも取り決められた。これに対し、パンガロスが不動産業者と手を組んで、カサディアスに仕返しを行うという結末に至る。

この記事の内容が1950年代のシドニー社会をどれほど反映しているかは明確ではない。しかし、少なくともギリシアクラブが在外ギリシア人の結合の場として機能していたこと、ギリシアレストランの経営者がギリシア移民の一つの成功例であったこと、そしてギリシア本国の風習や社会的地位が移民社会でも厳格に守られていたことが読み取れる。

### 2. 第二次世界大戦終結までのオーストラリアへのギリシア移民

アナスタシオス・タミスは、初期のギリシア移民を2期に分けている<sup>6</sup>。第1期となる1830～1869年は、冒険家、イギリス海軍のギリシア人水兵、逃亡者（1830～1850年）がオーストラリアに到着し、1870年代後半までにはオーストラリアの各植民地に金鉱探鉱者、旅行者なども登場した。第2期となる1870～1974年は定住の時代である。初期はイオニア諸島やエーゲ海諸島からの入植者が大半を占めていたが、1924年からアメリカによる移民数の制限と、ギリシア・トルコ戦争の小アジア撤退（1922年）をきっかけとして、ギリシア本土からの大量移民が始まった。ギリシア移民の職業は様々で、島民出身者は漁業に従事した。鉱山や農園で働く者もいた。

1900年代初頭には、ギリシア人の多くがニューサウスウェールズ州とビクトリア州でカフェなどをオープンし、後にオーストラリアの主要都市に大きなレストランを開いた。大規模農家になった者もいれば、広大な畑を耕して野菜や果物の卸売業者になった者もいる。大都市で食糧を扱い、貿易商になった者もいた。第二次世界大戦後、1952年にギリシアとオーストラリアの間で移民協定が結ばれると、ギリシア人はオーストラリアの他の州にも大量に定住するようになった<sup>7</sup>。

4 Ιωάννης Κ. Χασιώτης, Ολγα Κατσιαρδή-Hering, Ευριδίκη Α. Αμπατζή (επιμ.), *Οι Έλληνες στη διασπορά : 15ος-21ος αι.*(Βουλής των Ελλήνων, 2006).257

5 Charles E. Hulley, "When Greek meets Greek", *The Bulletin* (15 October,1952)24,30.

6 Ιωάννης Κ. Χασιώτης, Ολγα Κατσιαρδή-Hering, Ευριδίκη Α. Αμπατζή (επιμ.), *Οι Έλληνες στη διασπορά : 15ος-21ος αι.*(Βουλής των Ελλήνων, 2006).255.

7 *op. cit.*, 256.

### Ⅲ. オーストラリアのギリシア系住民の分断と結合

#### 1. ギリシア内戦から軍事政権までの社会的分断

第二次世界大戦の終わりとともに、ギリシア本国は内戦（1944～1946年）に突入し、イギリスやアメリカの支援を受けたパパンドレウ政府軍と、ソビエト連邦とその影響下にあったバルカン諸国の支援を受けた共産主義勢力が戦い合った。内戦の結果、ギリシアは東欧で唯一の非共産主義国となった。この戦いで10万人以上の命が犠牲となり、約9万人が難民となった。内戦後の社会混乱はさらに大きな規模の移民を生み出した。前章の図4と図5で確認したように、この時代にニューサウスウェールズ州とビクトリア州でもギリシア生まれの人口が急増した。そして、まさに1960年代に在外ギリシア人社会を分断する出来事が本国で生じた。1974年まで続く軍事政権の誕生である。ギリシアの戦後の政治は、短期間の民主主義の後、独裁、寡頭支配、クーデタが続いた。1967年に軍事クーデタにより誕生した軍事政権は、ギリシア国家のアメリカへの強い依存と共産主義者への恐怖を表していた。

1967年5月6日の『ブレティン』では「ギリシア人がギリシア人を嫌うとき<sup>8</sup>」という表題で、オーストラリア移民社会がギリシア内戦の影響を受け、分断の危機に陥った経緯を伝えている。

記事は「シドニー、メルボルン、アデレード、ブリスベン、ニューキャッスル、そして多くの田舎町にあるギリシアクラブでは、カードやブラックコーヒーよりも、白熱した政治的議論が優先されている。」という導入からはじまり、クーデタのニュースを受けて、各都市でデモ集会が行われたことを伝える。続けて、数年前にシドニーで起きたギリシア正教の対立<sup>9</sup>よりもはるかに今回の分断は深刻であり「ギリシアが内戦に突入するのではないか」と不安を抱くデモ参加者の様子を報道する。

シドニーのデモの様子は「参加者はギリシア領事館の外でスローガンを叫び、旗を振り、その後、ウィンヤード・ストリートにある米国領事館に向かって行進しようと試みた。」「約800人がギリシア劇場に集まり、軍事政権を容認したギリシア国王コンスタンティヌスの写真を引き裂いた。」などと伝えられている。

他方で、メルボルンの抗議集会については、「地元民に国王と王妃の肖像画を撤去するよう呼びかける決議が満場一致で可決され」、さらに「ギリシア人司祭には、ギリシア王室のための儀式の祈りと賛辞を中止するよう要請した」ことが報道されている。

以上の記事の内容から、軍事クーデタに抗議する在外ギリシア人の標的は王室であり、国王が民主主義を遵守できなかったことへの不満が行動となって表現されていることがわかる。また、同記事では、オーストラリアで主流となっているギリシア語新聞の内容が比較されている。

記事によると、オーストラリアにある9つのギリシア語新聞のうち、7つは失脚した政府を支持し、2つは軍を支持していた。ギリシア語新聞『ネオス・コズモス<sup>10</sup>』の編集者ゴゴスは、オーストラリアのギリシア人の大半は軍のクーデタに敵対的であり、「国王がクーデタに重要な役割を果た

<sup>8</sup> Brian Buckley, “When Greek hates Greek”, *The Bulletin* (6 May, 1967)31.

<sup>9</sup> 大主教エゼキエルは、19世紀後半より形成された地域的組織ギリシア共同体を、ギリシア正教会の大主教座に編成しようとして反発を招いた。詳しくは、Anastasios M. Tamis, *Greeks in Australia* (Cambridge University Press, 2005) 81-97.

<sup>10</sup> 1957年にディミトリス・ゴゴス氏によって創刊された労働党寄りの左派新聞。2017年12月15日、同誌の60周年特集において編集長は「既存の新聞とは対照的に、『ネオス・コズモス』はギリシア人労働者たちに権利を主張するよう促していた」と語っている。https://www.ekathimerini.com/society/diaspora/224154/greek-australians-neos-kosmos-newspaper-turns-60

したと考えている」と述べている。他方で、『ネオス・コズモス』と対立する新聞は、同誌は「共産党の影響下にある」と主張する。

クーデタ支持派の代表として週刊紙『フォス<sup>11</sup>』のオーナーであるパナヨトプロスの立場も紹介されている。彼は「ギリシアは共産主義国家に囲まれており、ベトナムの二の舞にはなりたくない。」と述べ、クーデタで失脚した前首相の息子を「知る限りでは、共産党員である」と語っている。続けて、パナヨトプロスは、オーストラリア在住の20万人のギリシア人の大半は国王に忠誠を誓っており、各都市のデモ参加者は、ごく一部の「赤旗を掲げた数千人の暴徒」に過ぎないと主張している。

在外ギリシア人全体の総意としては、国王がクーデタに関与したことは事実であり、むしろ国王の関与疑惑が、保守新聞のクーデタを支持する理由のひとつともなっている。『ブレティン』の「ギリシア人がギリシア人を嫌うとき」では、ギリシアコミュニティのリーダーたちが、両陣営の扇動者たちの間で暴力が勃発する可能性を懸念していることを伝え、最後に「多くのギリシア人が、世界中の人々にとって未解決の問題であるように見える疑問の1つを見失っているようだ。国王は本当にクーデタを支持していたのか、それとも犠牲者でもあったのか？」と締めくくっている<sup>12</sup>。

『ブレティン』の記事からは、本国の政治的動乱やイデオロギー対立により、オーストラリアの在外ギリシア人が分断され、メディアによりさらなる対立が深められていった様子が読み取れる。この分断はギリシア内戦から続く左派と右派の分断だけではなく、国家のシンボルである国王の評価をめぐる分断とも読み取れる。冷戦時代の対立の中で、ギリシア特有の政治文化が混ざり合い、その後も在外ギリシア人は本国の政治・経済が変化するたびに分断と再編を繰り返していくこととなる。1960年代はマケドニア問題、キプロス問題、正教会再編問題も移民社会に影響を与え、複雑なギリシア人同士の対立が生み出されていく時代であった。

## 2. オーストラリアのギリシア系住民をつなぐギリシア・カフェ

以上のように、オーストラリアのギリシア人社会は本国の政治的・経済的状況から影響を受けやすく、ギリシア人同士の分断を招いた。新聞は各々の立場を表明する媒体だった。それでは、ギリシア人同士はどのように結合していたのだろうか。

歴史学者レオナルド・ヤニシェフスキーと写真家エフィ・アレクサキスは、オーストラリア歴史博物館の協力のもとに、1982年から「彼ら自身のイメージの中で：ギリシア系オーストラリア人」という研究プロジェクトを立ちあげた。彼らは「ギリシア系オーストラリア人の社会的、文化的、歴史的イメージを、これまで試みられてきたものより丸く、より複雑で詳細なものにすること」を目的とし、「家族のスナップ写真、手紙、日記、私的な公文書、思い出の品、生きた記憶」を収集した<sup>13</sup>。その成果は2016年に初版出版の『オーストラリアのギリシア・カフェとミルクバー』の中にまとめられている<sup>14</sup>。本書

<sup>11</sup> 1960年代のオーストラリア社会学者によれば『フォス』は常に「オーストラリアのギリシア人の公式機関紙」と自称し、ギリシア王室とギリシア右派政府を支持してきた。すでに上述した2誌以外に、国内政治に中立な『ナショナル・トリビューン』や『ヘレニック・ヘラルド』も存在したが、ギリシア語新聞はイタリア語新聞と比べれば「党派的」でギリシア国内の政治的対立や軋轢をギリシア人社会で永続させる傾向があったと評価されている。Miriam Gilson, Jerzy Zubrzycki, *The Foreign-language Press in Australia, 1848-1964* (Australian National University Press, 1967). 32.

<sup>12</sup> 実際に同年12月13日に、国王は軍事政権に対する逆クーデタを行っており、失敗してローマへ亡命している

<sup>13</sup> Leonard Janiszewski and Effy Alexakis, “In Their Own Image: Greek-Australians’ National Project Past, Present and Potential Future.” in the UMAC Conference “Engaging the Community” (September, 2003).

<sup>14</sup> Leonard Janiszewski and Effy Alexakis, *Greek Cafes & Milk Bars of Australia*, (Halstead Press, Sydney, 2022). 初版は2016年に出版されている。

の主題となるギリシア・カフェ<sup>15</sup>という職業は固定観念としてオーストラリアに長く存在した。その理由としては、カフェ経営者に多数のギリシア系住民が存在したこと、そしてこの店がイギリス系・ギリシア系住民の間で、最も一般的な社会的・ビジネス的接点となったことがあげられる。

本書に掲載されているインタビューから、19世紀前半のギリシア系住民の地域的結合の過程が見えてくる。多くの証言の中で、20世紀初頭に経済的・政治的理由から祖先がギリシア（場合によっては小アジアやエジプト）からオーストラリアに移住したこと、そして過酷な長時間労働や白豪主義の人種差別の中で、ギリシア系住民が表向きはアメリカ式カフェを提供し、親族間では慎ましやかに祖先の文化を維持してきたことが語られる。ここでは象徴的なレックス・マリノスの証言を紹介する<sup>16</sup>（レックスは1988年にこのインタビューをシドニーで受けている。）

レックスの母方の祖父、アンソニー・カロフィリスは、1910年代半ばにドデカニサ諸島のカソス島からオーストラリアに到着した。ニューサウスウェールズ州のカフェで働いた後、最終的にワガワガに落ち着いた。1930年代後半から1940年代初頭にかけて、彼は自身のカフェ「ブリッジ・カフェ」を開店した。市民活動に関心を持ったアンソニーは、地元の商工会議所やフリーメイソン・ロッジにも積極的に参加するようになった。1944年、レックスの母アン・カリオピ・カロフィリスが父フランク・マリと結婚した。

レックスは子供のころ家族でカフェの上に住んでいた。彼は幼いころから2つの世界があることを理解していた。1つ目は、開店時の世界である。1日15時間、来客があり、商売という日常の世界で、外の世界が彼らの中に入ってくる世界だ。そして、2つ目は閉店時の世界である。日曜の夜は早く店を閉めるので、多くのギリシア系家族が、どこかのカフェに集合する。テーブルを後ろに下げてダンススペースを作る。蓄音機からポップソングや哀愁を帯びたレンベティカ（ギリシアブルース）が流れる。コンボロイ（数珠）を回す人、バックギャモンに興じる人、つまりギリシアの風景がそこに現れる。彼は「公の場で英語を話すよりも、プライベートでギリシア語を話す方が、より活気があり、感情豊かに、表現力豊かに話せる。」と回想する。そして、ギリシア料理の数々が並んだ場面を回顧し「私たちが食べた食事。カフェのメニューには載っていない食事。私たちの秘密の食事だと思った。」と語っている。翌朝には、カフェは再び営業を始め日常に戻る。彼らはステーキ・エッグ、フィッシュ・アンド・チップス、ミックスグリルなどの料理を提供する。彼らは同化への努力を継続していたが、時折酔っ払いが現れて「dago」という言葉を口にしたことを回想している。

レックス・マリノスの証言からは、20世紀初頭のギリシア系住民がアメリカ文化をイギリス系オーストラリア人に提供しながら、ひそかに故郷の文化を仲間内で保持しようとしていたこと、同時に人種差別が日常的に存在したことが読み取れる<sup>17</sup>。

1940年代にニューサウスウェールズ州のクータマンドラで営業していたシルバースターカフェも、婚約、結婚式、洗礼式、誕生日祝い、ビジネス上の集まりなど、ギリシア人およびより広いコ

<sup>15</sup> ギリシア・カフェとは19世紀末から20世紀初頭にかけての「イギリス式」オイスター・サロンやバー、1910年代までに登場した「アメリカ式」ソーダバーラーやサンデーバーラー、1930年代初頭までに登場した「アメリカ式」ミルクバーが進化的に融合したものだ。20世紀初頭、在米ギリシア人のオーストラリアへの移動が盛んになった。この流れの中で、アメリカ式のカフェ文化が持ち込まれ、ギリシア人を媒体とするギリシア・カフェが誕生した。ギリシア・カフェは20世紀の大半において、オーストラリアの大衆文化がアメリカ化していく過程の一部として機能した。1930年代半ばから1960年代後半にかけて、ギリシア・カフェの人気は全国的に高まり、特にニューサウスウェールズ州、クイーンズランド州、ビクトリア州の東部本土では、田舎暮らしの代名詞となっていた。op. cit., 12.

<sup>16</sup> op. cit., 128-129.

<sup>17</sup> 20世紀初頭には各地で大きな人種暴動が起こった。世界恐慌の時代にはギリシア系住民を含む多数の外国人所有の家屋、店舗、カフェ、ホテルが破壊された。op. cit., 127.

コミュニティのための催し物の中心地として機能した。イギリス系オーストラリア人も招待客として、ギリシア人家族の催しで伝統的なギリシア料理を味わったかもしれないが、ギリシア料理が受け入れられるようになったのは、1970年代後半から1980年代前半のことだった<sup>18</sup>。

### 3. 教会内戦

以上のように19世紀前半のギリシア系住民の一つの結合の場はギリシア・カフェであり、それは時には地域組織の中心にもなった。しかし、この地域組織も歴史の波の中で分断の道を進むこととなる。

第二次世界大戦前の初期のギリシア移民は相互扶助を目的として地域組織であるギリシア共同体<sup>19</sup>を各地に結成した。ギリシア共同体は、戦後大量にオーストラリアに流入した新移民に対して、保守的な姿勢をとった。つまり戦後のオーストラリアのギリシア人社会にはすでに新旧移民の間で対立があった。1950年代には、冷戦時代のイデオロギー対立、移民の急増、マケドニア問題、ギャンプルや家庭放棄を中心とする社会問題の増加が、地域社会に不安を与えた。1958年、19のギリシア共同体が中心となって全教会会議が開催された。この会議では、大量移民による変化の中で、ギリシア共同体がその管轄下にある信徒の統制を維持するための組織的な試みが議論された。会議の最終日、参加した共同体は、オーストラリア・ギリシア正教共同体連盟の設立を決定した<sup>20</sup>。他方で、同時期に、ギリシア正教会大主教の側から、古い共同体組織を弱体化させることを目的とした、教会再編成プログラムが始まった。このプログラムでは、教会が承認した信徒のみが参加する郊外の教会共同体（小教区）を新たに設立することが計画されていた。戦前の権威を維持しようとするギリシア共同体は教会共同体の設立に抵抗し、オーストラリアにおける教会内戦が勃発した。状況は、第4代大主教エゼキエル・ツォカラス（1959-74年）の就任によってさらに悪化した。ギリシア軍事政権の時代には、旧共同体の指導者たちは本国の体制に反対の立場をとり、他方で新共同体の指導者の多くと大主教は反共主義的見解のもとに独裁政権を支持した。ここにキプロスとの外交問題<sup>21</sup>も加わり、教会内戦はイデオロギー対立、外交問題の代理戦争の場となった。

1960年代後半に台頭し始めた第二世代の信徒たちは、これらの絶え間ない教会対立を目の当たりにし、世俗的で非宗教的な組織を形成し始めた。キャンベラのヘレニック・クラブがその代表例であり、4万人の会員、数百万ドルの豪華な施設、立派な社会福祉プログラムを誇っている<sup>22</sup>。

## IV. 現在のオーストラリアにおけるギリシア系組織の活動

### 1. オーストラリア生まれのギリシア系住民の動向

以上が戦後のオーストラリアにおけるギリシア系組織の歴史である。文化的差異や人種差別が残る新しい社会の中で、移民は必要に応じて結合し、政治上・イデオロギー上の対立から分断した。それでもなお、ギリシア系組織は存続しつづけ、オーストラリアで1974年から2016年の間に活動した社会経済的、スポーツ的、文化的または民族的なクラブ、協会、友愛会などの団体は1000以上確

<sup>18</sup> *op. cit.*, 180-181.

<sup>19</sup> ギリシア共同体 (Ελληνική Κοινότητα) という機関は、共同体生活の中心であり、言語教育を提供した。ギリシア共同体全体のために、正教信仰の管理者であった。彼らは、ギリシア正教の信仰を持つ人々のための統治機関として、19世紀後半にシドニーとメルボルンで結成された。Anastasios Tamis, *The Greeks in Australia* (Cambridge University Press, 2005), 74-75.

<sup>20</sup> *op. cit.*, 79-80.

<sup>21</sup> 1964年、キプロスのマカリオス大主教との抗争でキプロスを離れたフォティオス・クーミデイスをギリシア共同体指導者たちは歓迎し、エゼキエル大主教はフォティオスの即時脱退を要求した。*op. cit.*, 86-87.

<sup>22</sup> *op. cit.*, 97

認されている<sup>23</sup>。移民第一世代による組織は、新しい環境における相互扶助や愛国心の維持を目的としたものが多かったが、オーストラリア生まれの新世代は、ギリシア本国政府の関心から距離を置く傾向が目立った。彼らは祖父母の故郷というよりも、ギリシア系オーストラリア人として自らを認識する傾向があった。そのような中で、自分たちの年齢や関心に適切な新しいギリシア系オーストラリア協会を設立していった<sup>24</sup>。それでは、オーストラリアで活動するギリシア系組織の現在の目的はどのようなものか。筆者が2024年に出会った、ニューサウスウェールズ州のカリムノス島協会を一つの例として挙げたい。

## 2. ニューサウスウェールズ州のカリムノス島協会<sup>25</sup>

2024年9月、筆者はシドニーのパラマッタで開催されたギリシア・フェスティバルを訪問した。このイベントにはギリシア系オーストラリア人だけでなく、様々な地域にルーツを持つ人々が参加していた。舞台ではギリシア・ポップスが演奏され、若い世代がギリシアの伝統ダンスの渦を作っていた。多くの人々が会場を歩きかう中、筆者はある協会のブースの前で足を止めた。ブースには多くの海綿が飾られ、潜水用ヘルメット「スカフアンドロ」が展示されていた。そこはニューサウスウェールズ州のカリムノス島協会のブースだった。

ここで簡単に、1947年にギリシア領となったドデカニサ諸島<sup>26</sup>に浮かぶカリムノス島の歴史を紹介したい<sup>27</sup>。カリムノス島では海綿漁業が盛んで、19世紀半ばまで、ダイバーは素潜りで海綿を集めた。19世紀終わりから潜水用ヘルメット「スカフアンドロ」が導入された。新技術の導入は、ダイバーたちの経済構造を一変させた。労働期間の長期化、労働の強化、専門化と分業化、家族や協同組合による労働組織から企業による労働への移行は、昔ながらの労働者の反発を招いた。さらに、潜水病によるダイバーの早死、機械化による海綿資源の枯渇が問題となった。それでも、カリムノス島社会は海綿の工業化に徐々に適応し、その後も「スカフアンドロ」とともに海綿漁業を中心とする島経済を維持してきた。

以上がカリムノス島の簡単な紹介である。筆者が2024年のギリシア・フェスティバルで出会った協会は、この島に起源をもつギリシア系オーストラリア人のメンバーで結成されていた。彼らは協会活動として島の海綿漁業を紹介する展示を行っていた。「スカフアンドロ」とともにナショナルジオグラフィック出版の『カリムノス<sup>28</sup>』も展示していた。協会メンバー達は他のブースと比べれば、日常的なギリシア語を維持している印象だった。「スカフアンドロ」について筆者が「この機械は危険をとまなうんですよね」と聞くと、メンバーの一人が「そうだよ、たくさんの方が亡くなったんだ」と答えてくれた。しかし、スカフアンドロスとともに歩んだ島の歴史に、誇りを持っているようにも見えた。

<sup>23</sup> Anastasios Tamis, *The Hellenic history of Hellenes in Australia, 1974-2016* (Patakis Publisher, 2017). 597-601

<sup>24</sup> *op. cit.*, 53-54.

<sup>25</sup> 協会はギリシア語で「シロゴス σύλλογος」と呼ばれる。文化人類学者の内山明子はシロゴスを「人々の郷土愛に訴えて支持を得、いろいろな公共活動を通して郷土愛を具体的に表現するボランティアたちのグループである」と定義している。「郷土愛がもたらす「村人」の連帯と対立--ギリシャの山村におけるシロゴス活動の展開史」『社会科学ジャーナル』30(1) (国際基督教大学社会科学研究所、1991年)。87-106ページ。

<sup>26</sup> ドデカニサ諸島はイタリアやドイツなどの占領を経て1947年にギリシア領となった。イタリア占領下の諸島住民の抵抗運動については、石田憲「地中海におけるヨーロッパ内植民地——ドデカネス諸島をめぐる新たな帝国主義と抵抗運動のグローバル・ネットワーク」五十嵐誠一、酒井啓子編『グローバル関係学7 ローカルと世界を結ぶ』岩波書店、2020年、68-89頁を参照。

<sup>27</sup> カリムノス島の海綿漁業の機械化と社会変容については、エヴドキア・オリンピドゥを参照。Katerina Galani and Alexandra Papadopoulou ed., *Greek Maritime History-From the Periphery to the Centre* (Brill, 2022). 232-255.

<sup>28</sup> *Kalymnos* (National Geographic Society, 2011).

カリムノス島民の海綿漁業衰退後の動向について、多くの史料が現段階で未収集である。しかし、アナスタシオス・タミスの著書『1974年から2016年のオーストラリアのギリシア人の歴史<sup>29</sup>』の中で、オーストラリアのノーザンテリトリー州に、カリムノス島の共同体があったという情報を発見した。

アナスタシオス・タミスによれば、1953年、真珠産業を活性化させるため、オーストラリア政府は、回復力と技術で名高いカリムノスの海綿ダイバーを組織的に移住させる計画を開始した。しかし、移民したダイバーは成功しなかった。なぜなら、しばしば悲劇的な死亡事故が発生し、新しい環境は彼らにとってあまりに危険で過酷だったからだ。1955年以降、キプロスからの移民とともに、カリムノス島民がダーウィンに定住するようになった。この時代に、彼らは仕事を求め、主にカフェやレストランなどの小規模ビジネスを開き、建設・建築業に力を注いだ。一部の成功例が出身島に伝わり、1980年末までに約8,000人のカリムノス島民がダーウィンに定住し、地域のギリシア共同体の中核を構成した。カリムノス移民は、ほぼ2世代にわたって、子供たちが祖父母とともに故郷の島で幼少期を過ごす習慣を維持した。彼らは祖国への頻繁な訪問を続け、貯蓄の大部分を故郷の島に投資し続けた。

以上の情報から、筆者の出会ったカリムノス島協会は、戦後の真珠漁業活性化プログラムによってオーストラリアに移住した島民の一部によって結成されたと推測できる。1951年にシドニーで設立された同協会は、カリムノス島の文化、伝統、倫理、そして未来への関心を促進し、維持することを目的としている<sup>30</sup>。現在の主な情報発信ツールはFacebookである。協会はダンスイベントや食事会を企画し、主要なフェスティバルで「自分たちのルーツに敬意を表す」ために、海綿、カリムノスのダイバーキーホルダー、ユーモア溢れる「カリムノス語」がプリントされたTシャツ、カリムノス島に関する書籍、そして協会の会員権を販売している。

協会活動に携わる人々は対象となる地域にどのような感情を抱き、将来的に協会活動に何を望むのか。筆者はシドニーで知り合った、カリムノス島協会のメンバーA氏にメールにてインタビューを行った。質問は2つである。その回答を以下に記載する。

質問1：あなたの家族の出身地であるカリムノス島はどのような意味を持ちますか？

回答1：私は1969年にオーストラリアで生まれました。私の両親は共にカリムノス島で生まれています。そのため、幼少期には、主に両親の家族や生活について、カリムノス島が話題に上ることが多かった。両親は、孤立を感じさせる戦後の島の苦難について語っていました。しかし、その苦難にもかかわらず、生活はよりシンプルであり、特に祝宴の期間に家族や友人と過ごした時間は忘れられないものであったことを、聞いている人たちに常に思い出させました。大人になった私はこの島を訪れ、すぐに親近感を覚えました。訪問するたびにそのつながりはさらに強くなります。

質問2：オーストラリアには多くのギリシア協会があります。今後、彼らにどのような活動を期待しますか？

回答2：今後は、協会を立ち上げた人々がかなり高齢になっているため、小規模な協会の多くが合併すると私は見えています。若い世代にとっては、協会は過去ほど関連性のあるものではなくはなっています。それでも、協会は祭やダンス、その他のイベントを通じて、自分たちの文化を広めていくでしょう。

<sup>29</sup> Anastasios Tamis, *The History of Hellenes in Australia, 1974-2016* (Patakis Publisher, 2017).233-236.

<sup>30</sup> George Karantonis, "The Kalymnian Association of NSW positively ramps up activity in 2022." *Greek City Times* (4 June 2022). <https://greekcitytimes.com/2022/06/04/the-kalymnian-association-of-nsw-positively-ramps-up-activity-in-2022/>

このインタビューの回答からは、移民二世がギリシア国家というよりもむしろ、家族の生活が刻まれたカリムノス島という地域につながりを感じていることが分かる。家族の歴史が地域文化と結びつき個人のアイデンティティの一つを形成していく様子が読み取れる。A氏が述べるように、初期移民が形成したギリシア協会や共同体は多くの編成を経て、かつての影響力を失いつつある。しかし、カリムノス島協会のように、初期移民の地域文化を語りや祝祭の中で追体験し、再び自らのアイデンティティの一つとして取り入れていく活動は、多文化主義のオーストラリア社会の中で今後も継続していくのではないかと考えられる。

### まとめ

以上、本稿では雑誌記事や二次文献を中心に、戦後のオーストラリアのギリシア移民の分断と結合の歴史を概観してきた。戦後のギリシア移民社会は一枚岩ではなく、時代の政治的状況により、様々な対立軸が混ざり合い、人々を分断に招いた。新旧移民の対立、冷戦のイデオロギー対立、教会の地方分権と中央集権の対立、本国の政治体制に対する立場の違いなど、これら多くの問題が様々な背景をもつ小さな移民社会に流入した。オーストラリアの移民社会は、さながら近現代ギリシアで巻き起こる様々な議題を人々が直接討論するアリーナのようなようであった。

他方で、20世紀前半まではギリシア系住民に対する人種差別が存在し、彼らはイギリス系とは違ったカテゴリーの集団とみなされていた。白豪主義の中で、「非白人」として、ギリシア系住民は自らの文化を隠し、ビジネスとしてアメリカ式カフェを提供した。結成されては消えていった多くのギリシア系組織は、彼らにとって、その時代の経済的・政治的苦境を乗り越えるための一つのツールだったと考えられる。

第4章で紹介したカリムノス島協会は、半世紀以上その組織を維持してきた。現代の新しい世代においても、彼らは自身のルーツを尊重している。この遠く離れた故郷への回帰は、多文化社会の肯定、国際化の進展を背景に、個人が帰属意識を持てなくなっている、現代オーストラリア社会の関心を満たすものと考えられる<sup>31</sup>。今日のギリシア系組織は、グローバル化の世界の中で、個々人にアイデンティティを提供する場として機能していると言える。

受理日：2024年11月8日

---

<sup>31</sup> 藤川隆雄「オーストラリア史」山本真鳥 編『オセアニア史』（山川出版社、2000年）。165-167ページ。